

自ら規律と倫理を創り出す、プライドとしての武士道：

なぜ私は厳しい定型詩を愛するかー「乃木希典の霊よ目覚めよ」への補遺

Greatchain

June 19, 2025

新渡戸稲造が「武士道」という本を英語で書き、世に問うたとき、それは日本にはキリスト教のような普遍的な宗教がないではないか、という難詰に応えるためだった。しかし彼としては、これは次善の答えではなく、これこそキリスト教に勝るものという、プライドが込められていたかもしれない。

先日、乃木希典を論じたとき、私が忘れていたことは、この武士道の問題であった。乃木は、玉本文之進という叔父から武士道の精神を叩きこまれたが、この叔父は吉田松陰にとっても叔父であり、松下村塾によって彼ら一族は、すべて繋がっているとされる。これはうろ覚えだが司馬遼太郎によると、乃木が頬っぺたにとまった蚊を叩くと、玉本文之進は「それこそ私情というものだ」と教えたという。これは馬鹿げているが、面白い話には違いない。公のために「私情を排する」という精神を徹底させるなら、そういうことになる。

私がこういう話に惹かれるのは、実は私自身も、ある意味で、この武士道教育を受けていたからである。かつて私が自伝的エッセーで、紹介した私の祖父は、「曲がったことが嫌い」で有名だった。明治初年に、出来立ての中学校の剣道教師をしていたが、私は父から聞かされた話によって、会ったことはないが、写真がどことなく乃木希典に似ているこの祖父が、常に私の心の中心にあった。

前にも書いたが、この祖父は、ある人の指導を受けて覚えた指物師としての腕前がプロ級であり、彼はこれを見せびらかすこともなく、無言の矜持と、人としての責任感だけを貫いて、尊敬を受けて生涯を過した。これはあのイーロン・マスク氏が、日本の技術者たちを訪ね歩いて、感嘆していることである。彼はユーチューブを通じて、私に何度も連絡してくるが、私は応えたことがない。今、私はこれまでの無礼を謝すとともに、お答えしたいことがある。それは、彼の求めていたものが**日本の武士道**だということである。

それはもちろん、日本の誇る技術のひとつである名刀のようなものに、限られてはいない。それは、厳しくかつ繊細で、言われずとも責任を負う日本精神、すなわち武士道の持つも

のである。これは武力とも軍国主義とも全く別の、平和思想である。これは私自身の内面を探てみるとよくわかる。私は議論すると、かなり喧嘩好きだが、敵と戦って滅ぼせと言ったことはない。私がよく論ずる、「自決のすすめ」とか「甘ったれるな」といった議論は、喧嘩して勝つためではなく、人々の誇りに訴えて戦争をやめさせるためである。

これが私の考え方の基本にあるもの、すなわち宇宙に向って発せられている私の「波動」あるいはエネルギーである。波動は誤魔化すこと、ウソをつくことができない（と、私はプレアデス人から教えられている）。

これはある謎を解くカギになっている——。私が入々に愛され、神々に愛され、神に愛されていることは、どう考えても確かなようである。ではなぜ、私に敵意をもつ人々が、私の「波動」を怖れたり、脱力感を覚えたりするのか？ もし私がただ単に愛されて、蝶や花のように保護されているだけなら、私など一撃のもとに滅ぼされるだろう。それがそうならないで、私が怖がられるということは、私の「波動」がそういうものとして働いていることを意味するだろう。私の発する「波動」は、厳しい規律または倫理として——武力や敵意によるのではなく、またキリスト教の「愛」によるのでもなく、——「武士道」として相手を圧倒し感化するものであることを意味するだろう。

そしてこれは、私だけが持つものでなく、本来、日本人全体が持っている民族性ではないだろうか？ この「武士道」の奥にあるものをもっとはっきり言えば、それは「**自分との闘い**」である。私がこの思想を、貴重なものとして意識するようになったのは、アイルランドの詩人 W・B・イェイツ（1965-1939）の、「他人との闘いからはレトリックが生まれるが、自分自身との闘いからは詩が生まれる」という言葉からである。We make out of the quarrel with others, rhetoric, but of the quarrel with ourselves, poetry. わざわざ原文を付したのは、その美しさを味わっていただくためである。強い言葉は美しい。さらに現時勢についてこれを解説すれば、「詩」とは真実ということであり、「レトリック」とは、ますます隠せなくなってきたこの世界の、騙しや陰謀のことである。あるいは区別がはっきりしてきた、目覚めと惰眠のことである。我々は、自由意志によってどちらかを選べ——しかも即刻！——と今言われている。

私が自分の作った殊更、厳しいソネット（厳密にはペトラルカ風ソネット）の中で、最も厳しい型式を取りながら、内容的に自分で最も満足しているのは「極端に醜い女」の詩である。私は自分を、この詩の創造主として、「永遠欠番」にしたいと思っており、これは私の中で起こった、自ら世界の罪を被ろうとするドラマで、何ものかに導かれたという感覚が残っている。

ところでここで、私の正気を疑わせるかもしれないようなことを、言わせていただく。ユーチューブを見ていると、私に対してあらゆる（特に日本の女性の）神々や、龍神のような霊的存在が現れて私を忠告するが、この中で私が最もうれしかったのは、龍神様に交じってベートーヴェン（の神？）が出てきたことである。ここに現れたベートーヴェンはやけに恐ろしい顔をしていたが、何かよくわけのわからないことを言っていた。それからまた別のところでは、定番の彼の肖像画が出てきて、どういうわけか、しばらくの間、灯りが明滅していた。これなどは確かに、私の目の錯覚であり得る。しかし私はベートーヴェンが、私の「極端に醜い女」のソネットに**感応してくれたもの**と考えたいのである。

彼の第5交響曲「運命」は英語ではFateとなっているが、私の「極端に醜い女」ソネットも、私自身が恐ろしい運命と戦い、美の神に訴える詩である。彼が「超絶技巧」を用いて、この世界に2つとない交響曲を書いたとすれば、私も超絶技巧を用いて、世界に2つとないソネットを書いた。そして私の宇宙との戦いは、妥協もごまかしも許さぬ「武士道」からきている。それは、この世のすべての現実を私自身が引きうける、という精神からきている。

ただ私は、どちらかと言えば、第五交響曲より第六交響曲「田園」の方が好きである。私の芸術鑑賞の原点は、生涯にたった一度だけ経験した、美のエクスタシーからきている。私は「美のアイデア」というものを信ずるが「善のアイデア」は信じない。そこには宗教的ジャッジメントが、どうしても入ってくるからである。ユーチューブの動画の中には「どうしてもお前を許せない」という内容のものがある。これは私の美の信仰に関係しているのだろうか？